

科長佛陀寺旧蔵の版木について

竹 谷 俊 夫

一 はじめに

佛陀寺は河内と大和を画する二上山の西方、大阪府南河内郡太子町大字山田二九〇番地に所在する浄土真宗本願寺派の寺院^①である。この寺院については、境内に遺存する佛陀寺古墳が終末期古墳としての重要性から考古学研究者に注目されて来た。しかし、寺院そのものの歴史や文化財についての研究はあまり進展しておらず、上野勝巳氏が紹介された『河陽盛光山仏陀寺縁起』^②が知られているに過ぎない。この度、偶然の機会に佛陀寺の新たな版木を確認することができたので、上野氏の驥尾に付して紹介することにした。

二 佛陀寺について

1 山田村仏陀寺については、享保元年（一八〇二）に刊行された地

誌『河内名所圖會』^③二（河二ノ卅七ウラノ卅八オモテ）に、次のように記されている。

山田磨墓

山田村佛陀寺の境内にあり又西の方に荒塚壹ヶ所あり

塚上に八幡社在す

親鸞聖人御腰懸石

山田村佛陀寺にあり聖人むかし上宮太子の

御墓山に詣したまふ時ここに憩ひたまふ御旧跡也

此寺の開基は秦盛光にて

今本願寺御門主御来寺なり

すなわち、佛陀寺の境内には山田磨墓があり、親鸞が太子廟に参籠された折、山田で休息された時の御腰懸石が残る御旧跡である。開基は秦盛光^④で、本願寺の門主が下向される由緒正しい寺院で

あると解説している。

これとは別に二上岳を背景とした絵図(河二ノ卅八ウラ)の中央には、東から西に伸びる丘陵上に佛陀寺本堂の大屋根が描かれ、その右側に「山田丸塚」(山田磨墓)、左側に「カミツカ」(荒塚)の名が見える。また、佛陀寺の上方に「孝徳天皇陵」、下方には「推古天皇陵」と「二子塚」が描かれている。

「聖人むかし上宮太子の御墓山に詣したまふ」とする根拠は、正徳五年(一七一五)刊行の『高田開山親鸞聖人正統伝』にあると思われる。親鸞の御参詣は二度あり、一度目は、建久二年(一一九一)十九歳のとき、「同年九月十二日、河州石川郡東條磯長聖徳太子の御廟へ参詣ましまは、十三日より十五日まで三日間御参籠なり。第二の夜夢想を蒙りたまふ」とあり、また、二度目は、建仁二年(一一二〇)三十歳のとき、「同月二十一日河州磯長聖徳の御廟に三日三夜御参籠、終日終夜の念誦也。蓋し昔年靈告の密恩を謝し、亦すべて佛法興隆の廣徳を報ぜらるゝ也」と記されていることによったのであろう。

『河内名所圖會』の他に、佛陀寺を知る資料として版木『河陽盛光山佛陀寺縁起』が伝えられている。表と裏の両面にわたって縁起が刻まれ、親鸞の二度にわたる磯長聖徳太子の御廟への参籠の折、佛陀寺に立寄られ、秦川勝の後裔とされる秦盛光が屋敷で親鸞の教えを受け、佛陀寺を創建した旨が記されている。上野勝己氏は『高田開山親鸞聖人正統伝』の記事をより脚色した縁起として描かれて

いると指摘し、版木の製作年代を本堂再建の寛政八年(一七九六)頃と考えられている。⁽⁶⁾ 以下は、上野氏の翻刻である。

【表面】

河陽盛光山仏陀寺縁起

御厨に安置奉る御本尊八祖師聖人御歳三十一才乃ころ
 当山開基秦川勝之男盛光之後胤盛光之請二よつて
 御ちやうこく在しますなり当山靈地の来由を尋るに聖人
 十九才秋頃南都碩徳光俊律師法隆寺覚運僧都に値
 て法相等乃奥旨を極めんとて慈円僧正に免許を蒙り
 たまひ則正全坊召連たまひて覚運僧都御所へきたりて
 因明乃奥旨を学び給ひしころ上宮皇子御廟参籠
 と思ひ立せられ即ち御参るうの折節計ざるニ草庵ニ
 たちよりたまひ盛光尊顔を拝しつらつら緯の参
 差をあんずるに奇異の思ひありこひねがわくハ此夜
 この草庵に御逗留ましまさバ難有とあれば聖人
 志をかんじ即ち御滞留ありて御法話にあふて盛光
 乃悦甚し今来後ハ我師はんなるべし若貴僧何れ要法
 を弘め給ふ共御心に随ハんとやくし奉なり是聖人初め
 て当地に御立より給ひて来数、御返りう在します

御旧地なり或とき正全坊申されしハ御廟籠乃時太子

【裏面】

聖人へ対し靈言あると思ひて夢覚て聖人に尋奉れ共
 何事も談りたまハじと靈異別記云々其後盛光太子乃御廟二
 通夜申せしか奇なる哉廟中より告て曰く先の客僧
 是凡人にあらずとの靈夢を感じしより格別尊重乃思ひ
 深りしに果して六角堂の靈告是天下に知る処其とき
 盛光聖人にしたがひて念佛門に入り師弟契約申法名
 盛光房祐元と賜る即十字名号頂戴仕るなり其後聖人
 三十一才乃とき彼御木像願奉りしか御聞いたまハざれ
 □押て上宮太子の御作仏問々安置奉る聖人亦近くハ
 □等遠くは有縁乃同行御化益と思召て御ちやう
 □く給はらば難有とあれバ聖人止事を得ず荒木作り
 □て御ちやうこくありし御本尊なりかくの靈地ゆへ覚
 □上人御滞留ありて六字乃尊号をのこした蓮如
 □人ハ格別殊更祐閑ハ御愛弟たりしが御りんじゆう
 □ハ御重宝の祖師聖人御骨ゆづり給ひて曰く吾骨も
 □もに納むべしとの御遺げんによつて代々御骨ちやう
 □ひ仕るなり

三 新発見の版本（第1〜4図）

版本は縦二三・七cm、横九・〇cmの短冊形を呈し、厚さ一・六cm
 ある。材は広葉樹と思われるが樹種は不明である。文字は版本の両
 面に陽刻されている。個人蔵。

【A面】

河州石川郡科長郷山田邑

佛陀寺

高祖聖人御舊跡

縁起靈宝略之

一行目の「河州石川郡科長郷山田邑」は所在地で、現在の大阪府
 南河内郡太子町山田にあたる。二行目は下方に「佛陀寺」と寺名が
 刻まれる。三行目には大きな文字で「高祖聖人御舊蹟」と記され、
 聖人すなわち親鸞との関わりが強調されている。四行目に縁起靈宝
 を略すとある。

文字は整った楷書体であるが、輪郭は丸く摩耗し、長年にわたつ
 て使い込まれたことが分かる。行間には約一cm幅の鑿痕が縦方向に
 認められる。



第1図 版木 A 面

第2図 版木 A
面拓影 (反転)

第3図 版木 B 面

第4図 版木 B
面拓影 (反転)

〔B面〕

祖師御旧跡

御佛飯志

佛陀寺

一行目は真ん中やや上方から下方に向かって「祖師御旧跡」と刻まれる。祖師とは親鸞聖人のことである。二行目は上方にやや大きな文字で「御佛飯志」とあり、佛飯を乞うための版木であることが分かる。三行目は下方に「佛陀寺」と記される。版木に刻まれた文字は全体に均整を欠き、右上がりの癖字である。行間には約2cm幅の荒々しい鑿痕が認められるが、鑿痕から推定するに版木を彫るための専用の鑿を使用したとは考えがたい。版木の上方に彫り残しがあり、右上に「御□」、左上にも墨書の一部が残っているが、その意味内容は不明である。

さて版木 A 面と B 面の新旧について見てみよう。A 面は均整の取れた楷書体の文字が、短冊形の板にバランスよく配置され、鑿痕も乱れていない。それに対し、B 面の文字は均整を欠き、右上がりの癖字でバランスも悪い。鑿痕も雑で専門家が彫ったとは考えにくい。B 面の上方に残された墨書は A 面と関係するものと考えられる。要するに、版木 A 面は専門家によって製作され、B 面は時を置いて佛陀寺の関係者によって追彫されたと見られる。

四 山田磨墓（第5図）

河内名所図会に見える「山田磨墓」は、佛陀寺の境内にある。大正時代に歴史学者の喜田貞吉氏が踏査し、『歴史地理』に紹介している。⁽⁷⁾「長さ四間、横三間高さ三尺ばかりの土饅頭で、其の上に石棺が露出してゐる」。石棺は「輕墓の掘抜石棺式で、屋根も身も一寸、幅が四尺と云ふ見当だ」と的を得た説明がなされている。本墳はその重要性から、昭和四七年（一九七二）に大阪府の史跡に指定された。

上野勝巳氏によれば、石棺は凝灰岩を剥り抜き、前面に口を開けた横口式石



第5図 山田磨墓（佛陀寺古墳）

棺で、長さ二・五m、幅一・二mある。大正時代に長さ三三・〇cm、幅二四・五cmの須恵質の埴が出土した。「石棺はおそらく石室に入れられず、石棺を直接土中に埋め、これらの埴が石棺を保護乃至周囲と区画する形での役割を果たしていた」との卓見を披露され、七世紀中頃の築造と推定されている。⁽⁸⁾なお、地元では所在地名の「山田」から蘇我倉山田石川磨の墓と伝えられている。

五 まとめ

今回、紹介した版木は、従来から知られている『河陽盛光山仏陀寺縁起』とともに、江戸時代の佛陀寺の宗教活動の一端を知るための資料として重要であると考える。佛陀寺に参詣する人々に縁起の刷物を配布し、親鸞聖人から教えを受けた秦川勝の後裔である盛光によって創建された由緒正しい寺院であることを説きながら、寺を維持するための布施を求めたのであろう。

佛陀寺の北側には日本最古の官道である竹内街道が通り、地元の人々だけではなく、街



第6図 井関に立つ道標

道を往来する人々を佛陀寺へと導いたことが知られる。佛陀寺の北東八〇〇mの井関には天保年間に建立された「左 親鸞聖人御旧蹟」と刻した道標(第6図)が今も残っている。道標の近くには孝徳天皇陵があり、佛陀寺の近くには推古天皇陵や二子塚もある。江戸時代のみならず、日清、日露戦争に勝利して民族主義的傾向が台頭していく時代にも皇陵や歴史上の人物の墳墓を訪ね歩く人々が多かった。そうした人々に縁起の刷物や集印、史跡の絵葉書などが恰好の記念品となったのである。

註

- (1) 佛陀寺(秦秀和氏)は、『大阪府宗教法人名簿』によれば、浄土真宗本願寺派に属し、大阪府南河内郡太子町大字山田二九〇〇番地に所在する。
- (2) 上野勝己「高僧の御廟参籠伝承」(『聖徳太子伝―太子信仰の世界―』、平成八年度企画展図録、太子町立竹内街道歴史資料館、一九九六年八月)、二四～二五頁。
- (3) 秋里籬島『河内名所圖會』二(大坂河内屋喜兵衛ほか、一八〇一年〔享和元年〕)。
- (4) 里上龍平「門主の御骨の寺 誓願寺」(『藤井寺市史』第二巻 通史編二 近世、藤井寺市史編さん委員会、二〇〇二年一月)、六二〇～六三一頁。佛陀寺の開祖秦盛光は藤井寺市大井にある誓願寺(盛光寺)の開祖でもある。
- (5) 『高田開山親鸞聖人正統伝』は、佐々木月樵編『親鸞伝叢書』(無我山房、一九一〇年七月)に収められている。一三三三～一三五・一六八～一六九頁。国立国会図書館デジタルコレクションによる。
- (6) 註(2)前掲書に同じ。
- (7) 喜田貞吉「南河内の珍しい石棺(中)」(『歴史地理』第一九卷第

三號、日本歴史地理學會、一九一二年三月)、三二～三八頁。喜田貞吉氏の紹介以外に、次の文献がある。

岩井武俊「南河内地方旅中の見聞」(『歴史地理』第一九卷第五號、日本歴史地理學會、一九一二年五月)、五三～六七頁。

南河内郡東部教育會編『郷土史の研究』(南河内郡東部教育會、一九二六年六月)、一八三頁。

岩井好一ほか編『太子町誌』(太子町役場、一九六八年四月)、六四～六五頁。

山本彰「河内仏陀寺古墳とその年代」(菅谷文則編『王権と武器と信仰』、同成社、二〇〇八年三月)、三八四～三八九頁。

上野勝己「王陵の谷・磯長谷古墳群―太子町の古墳墓―」(太子町立竹内街道歴史資料館、一九八四年三月)、二六～二八頁。

(8)